

# 100%民間で実現した観光ファーム

おおむら夢ファーム・シュシュ（長崎県大村市）



## ■ プロジェクト実現のプロセス

長崎空港から車で北へ15分、長崎自動車道から6分、佐世保市に隣接する福重地区に、年間48万人が訪れる「おおむら夢ファーム・シュシュ」がある。

「シュシュ」というのはフランス語で「お気に入り」という意味。地元の農家8戸が集まって始めた、農産物直売所、アイスクリーム・洋菓子・パンの工房、レストラン、収穫体験施設、加工工場を備えた「食と農」の交流拠点だ。総敷地面積1万5000m<sup>2</sup>、大村湾が一望できる景色のよい高台にある。

福重地区一帯はもともと果樹・花

卉栽培が盛んな地区で、40年前より観光用のナシ狩りやブドウ狩りで有名。収穫時期の8～9月で約4万人を集めていた。しかし収穫期以外はまったく来訪者がなかったことから、福重地区の農家40人が集まり農業農村活性化協議会を結成。1年中お客さんに来てもらえる取り組みに着手した。

まずは全国の実例を見て回った。こうした施設のほとんどは行政がつくり農家が賃料を払いながら運営をする「指定管理者」のスタイルが多い。協議会では当初、第3セクターでやろうとしたが、うまくいっているところは少なく、民間でやっているところのほうが成功していることが

わかった。第3セクター方式が無理なら多くのメンバーが抜け、借金してでもやろうと残った有志はわずか8人だった。

「いまでこそ“地域の農業活性化に情熱を傾けた8人”となっていますが、“盃を傾けて逃げ遅れた8人”とも言われています」と笑うのは山口成美社長（49歳）。自らも養豚業を営んでいる。8戸の有志農家の内訳は、ナシ農家、ブドウ農家、カーネーション農家、養豚農家、ミカン、モモ農家など。8人のうち3人の土地が集約していた場所を中心に事業が始まった。立ち上げに農水省の農業構造改善事業や県・市の補助金を受け、残額は1億円



左／標高100mの高台にある「ぶどう畑れすとらん」のテラスから大村湾が一望できる  
上／拠点施設の全景 下左／シュシュ入口の看板 下右／山口成美社長



を超える借入金で事業に取り組んだ。

### ■ 具体的な取り組み

平成8年にビニールハウスで農産物直売所「新鮮組」を開始。平成9年に付加価値の高まる農業を目指し、その取り組みとしてアイスクリーム工房「手作りジェラートシュシュ」をオープン。初日から1000人以上が押し寄せる人気となり、事業に勢いがついた。平成10年に会社設立。1次産業（農業生産）を基本とし、2次産業（加工）、3次産業（販売、サービス）の一貫性を確立した6次産業を目指すとともに、農業後継者の育成を図ることを目的とした。

平成12年4月、総額4億円を投資した拠点施設「おおむら夢ファーム・シュシュ」がオープン。人気のジェラートやシャーベットをはじめ、パン工房で作ったできたてのパンも販売。地元だけでなく県外から訪れる人も増える。平成17年には農産物直売所「新鮮組」を増築オープン。そこに洋菓子工房を増設。地元産の牛乳と卵で作られた「ケッコイケてるシュシュプリン」は、平成20年日本農業新聞主催の「2007一村逸品大賞」で金賞受賞、第38回長崎県特産品新作展では「最優秀賞」を受賞している。

そして平成20年に農産物の加工センターができ、ジュースやジャムな

ど、通年の農作物の需要と雇用を生みだした。

「シュシュ」で重視していることは、加工品はすべて地場産の材料を使う、ということ。平成12年にオープンした「ぶどう畑のれすとらん」も例外ではない。つまり地元の旬の農産物を無駄なく使うために加工品工房やレストランがあるという考えだ。

「これまで農家は、いい品物を作って高く売りたいと努力してきました。しかし、いい品物がたくさんできると豊作貧乏になる。豊作のときは味もおいしいのですが、豊作で価格が暴落し、贈答にも使ってもらえない。それが市場原理です。そこで、豊作の



1



2



3



4



5



6



7



8



1— 直売所「新鮮組」ではとれたての農産物が売られている  
 2— 壁には生産者の顔写真と農産物の紹介が貼られている  
 3、5— 洋菓子工房では人気商品「ケッコイケてるシュシュプリン」のほか、地場産の材料で作った洋菓子が豊富にとり揃えられている  
 4— 農業塾の塾生の発案でつくったジャンボニンニク  
 6— 新設した加工工場で作ったジュースはすぐに人気商品に  
 7— 農業塾の畑で採れたブルーベリー  
 8— 若い販売員たちの笑顔で明るい店内



9

9—お客さんからのリクエストで始まった「ぶどう畑のれすとらん」でのレストランウエディング。この日も大分県在住のカップルが挙式した

10—レストランの看板

11—レストランを手伝っているのはフランスからの研修生アリアヌさん(左)とロリアンさん(右)



10

11



12

13



14

15

12—拠点施設にはジェラート売り場、パン工房、体験教室がある  
13—その場で作って食べる体験教室は子どもたちに大人気  
14—できたてのパンが販売される  
15—果汁たっぷりの夏ミカンとトマトのジェラートが一番人気





上／契約農家のブドウ畑で講習を受ける農業塾の塾生たち 右上／ブルーベリー畑に立てられた農業塾の看板  
右下／塾生と地元農家でつくったオリジナル焼酎

作物を無駄にしないためにもジュースやジャムに加工して長期で売るシステムが必要でした」

もともと農協で営農指導員として働いていた山口社長は、農家の生産物を少しでも高く売ってやりたいと日々努力していたが、農畜産物は市場価格に左右されるため農家の労働に見合った収入が得られないと言う理由で農家は大幅に減少した。このままでは、地域の農業はさらに衰退してしまう。そこで従来の農業（一次産業）に加え二次産業の加工、三次産業の流通・販売（掛け算）の六次産業へのチャレンジが始まった。

「シュシュ」では、風傷などで売物にならない果物や規格外品をなるべく高く買い取り、加工品にする。そこに雇用が生まれ、特産品が生まれる。地域活性化のスパイラルが生まれる。

現在、従業員75名。昨年できた加工工場が順調にいけば、さらなる雇用が見込まれる。こうしたシュシュの活動が評価され、平成19年全国地産地消活動優良表彰（交流促進部門）

において最高賞である『農林水産大臣賞』を受賞した。

### ■さまざまな工夫

#### 直売所「新鮮組」

新鮮組ではPOSシステム採用している。1時間ごとに売り上げ内容を生産者にメール配信し、在庫が少なくなったら追加してもらう。よくある、午後に行くと何も無い直売所、にはしたくないという思いからだ。陳列された作物の近くには、生産農家の紹介が掲げられ、農産物の旬や調理法まで情報提供している。

また、商品に貼った表示にも工夫が見られる。生産者情報と価格はミシン目で切り離せるようになっていて、購入時に価格のみはずせば贈答用としても使える。実際、食の安全に関心が高まっている昨今は、野菜の詰め合わせや果物セットなどの地方発送の需要も多いという。直売所の売り上げは約3億7000万円/年となっている。

#### 体験教室（食育体験）

施設内にある体験教室には、年間約1

万人が参加している。参加費1人1000～1200円で、手作りウインナー教室、地産地消のミルクパン教室、いちご大福とシュークリーム教室などさまざま。その場で作ってその場で食べる体験教室は子どもたちに人気だ。

食育体験では、学童クラブの子どもたちと一緒に、芋の植え付けから収穫、洗って商品にして売るところまで一連で取り組む。子どもたちに「農」の楽しみを伝える場になっている。

#### 農業塾

平成19年に開校した農業塾は、団塊世代に向けた帰農推進の一環。長崎県内だけでなく近県から来る人も多く、これまで210人が参加。活動内容は栽培指導にとどまらず、農機具の使い方、ジャム作りやそば打ちなど、塾生の要望を取り入れたカリキュラムにしている。

長崎県は荒廃農地面積が全国一多い。荒地にイノシシなどが出没し、農作物を喰い荒らすことが問題となっていた。そこで「荒れた農地を宝の



左上／収穫体験ができるハウス 右上／福岡や大分から通ってくる塾生たち 下左／メロンの文字入れ講習会。指導するのはシュシュの農業指導員の岩崎義秀さん 下中／細い釘で文字をいれると数週間後には文字入りメロンの完成。メロンは1個1000円で購入できる 下右／北海道から農業研修にきている2人



山にしよう！」と農業塾の塾生たちが荒廃農地に芋を植えた。この芋を100%使い、地元の農業後継者と力を合わせて焼酎を作った。『よっこいしょどっこらしょ』と『団塊の華』は塾生オリジナル焼酎で、平成20年から直売所で売られている。また昨年からは塾生の発案で珍しいジャンボニンニクを生産、それにナシを加えて焼肉のタレを作る構想を進めている。塾生たちは、生産だけでなく加工販売まで勉強できると、意欲満々だ。

#### 地元農家との連携

大村市グリーンツーリズム推進協議会は35戸の果樹栽培農家などで構成されている。大村市北部地区から大村市全域に及ぶツーリズム基地局をネットワークし、都市住民との交流を地域振興の中心に位置づけ、地域の活性化を目指して、さまざまなイベントや農業体験を実施している。地区内に点在する観光農園のほとんどが、「シュシュ」の半径2km圏内に集中していることもあり、協議会の事務局は「シュシュ」内に置かれ、情報発信の中心的役割を果たしている。

「シュシュ」の敷地内にもビニールハウスがあり、春にイチゴ狩り、夏はメロン狩りと収穫体験ができる。ハウス内は回転ベンチ栽培なので小さな子どもから車いすの方まで楽しむことができる。

#### ■ 今後の課題と夢

最後に、山口社長に今後の課題と抱負を尋ねた。

「いま全国の農業従事者は324万人で、日本の人口のわずか3%です。そのうちの40%以上が70歳以上の高齢者、60歳以上を数えると70%に達し、次代を担うはずの40歳以下はわずか13%です。農業立県と言われ

る長崎県でも6万人いた農業従事者は5年間で13%減少しています。日本の農業自給率を高めるには、なんとも心もとない数字です。

これまでの農業の3Kは“きつい、汚い、危険”でしたが、今の3Kは“高齢化、後継者不足、荒廃農地”です。シュシュが目指すのは“観光農業でお客様に感動を与え、後継者に希望を与える”という明るい3K産業です。夢のある農業をしていかなないと後継者は育たけません。生活が安定して成り立つような農業を提案し、どんどん実践していきます。消費者も巻き込んで、農業のファンを増やすのが夢です」と語ってくれた。

#### プロジェクト概要

所在地：長崎県大村市弥勒寺町486  
総敷地面積：15000m<sup>2</sup>

- ・直売所「新鮮組」……208.4m<sup>2</sup>  
(売上約3億700万円/年)
- ・ぶどう畑れすとらん……630m<sup>2</sup>  
(売上約1億4000万円/年)
- ・洋菓子工房……78.4m<sup>2</sup>  
(売上約3300万円/年)
- ・収穫体験施設……1000m<sup>2</sup>  
(売上約740万円/年)
- ・拠点施設他……500m<sup>2</sup>

(売上約1億8500万円/年)  
・加工工場……278m<sup>2</sup>

補助金：農業構造改善事業(1億9700万円)  
運営主体：農業生産法人 有限会社シュシュ  
開業：平成8年に直売所を開始。平成10年に有限会社かりんとう設立。平成15年に有限会社シュシュに社名変更。社員数75名(平成21年)  
連絡先：農業生産法人 有限会社シュシュ  
TEL.0957-55-5288